

“ブルシット・ジョブ” から “エッセンシャルワーク” へ コロナ禍から見える資本主義の根本矛盾



オンライン ZOOM 講演会 (2020 年 6/27)「資本主義と環境危機“コロナ禍から気候危機”へ」で、齋藤幸平さんは「コロナパンデミックで社会的になくても問題もない仕事ブルシット・ジョブと社会に本当に必要な仕事エッセンシャルワークとの間の矛盾・不合理が具体的に明らかになった。資本主義の格差の構造を根本的に是正する必要がある」と指摘しました。

そして今のコロナ感染症によって現れてきた矛盾や格差は気候変動危機においてはコロナどころではない。コロナから学んでこの危機の原因を把握し社会システムを変えなければならないと語りました。

失われた 30 年

日本のバブル崩壊後の 30 年は、構造改革 (小泉政権)、アベノミクス (安倍政権) と続いたが景気は良くなならない。それどころか非正規雇用の拡大・ブラック企業・サービス残業・競争激化と格差と貧困を拡大させた。“資本主義は経済成長を前提としている”がゆえに経済成長しないこの時期が「失われた 30 年」と言われるのです。競争の激化・人々の生活は貧しくなっていく、6 分の 1 の人々は預貯金もない。「必死に頑張った結果がこれでいいのか?」との不満が...

“生活の目的と手段との逆転”が人間と資源環境との間で、経済活動の中で行われ格差と不平等を生み出している。だからこの矛盾を解決する為の“生活の改善&自然環境を守る生活の必要性”を指摘しました。

ブルシット・ジョブとエッセンシャルワーク

コロナパンデミックで感染防止のためホームステイとして“テレワーク” (新しい技術) が示されたがあらゆる労働者が家で出来るわけではない。たとえばごみ収集・運送業・医療・介護・スーパーでの仕事・工事現場・学童などのエッセンシャルワークは現場で働く必要があり社会の維持、生活の維持のためにホームステイしているわけにはいかない。快適なテレワークが出来たのはこれらエッセンシャルワークの労働によるのです。

なのにマーケティングのようなテレワークの仕事をしている人々には高い給料が支払われており、コロナウイルスの危険を押しつけて現場で働く人々の給料は低いと言った今の社会の矛盾が現れてしまいました。社会になくても問題のない仕事「ブルシット・ジョブ」の実態が明らかになったのも、コロナパンデミックによるのです。毎日職場で働かなくてもいい仕事ブルシット・ジョブについている人々が高い給料を取る (日産ゴーン氏がいなくても車は作れるが現場労働者がいなくては車は作れません) というように、失われた 30 年間に経済はブルシット・ジョブによってのっつけられてしまったのです。だからウォール街が閉まっても市民には問題ないが、ウォール街に莫大なお金が動くので閉められません。

逆にエッセンシャルワークの現場は疲弊し雇用は不安定に...

“社会において本当に必要不可欠で、誰かが必ずやらなければならない仕事エッセンシャルワーク”が何であるかがはっきりと浮かび上がってきたのです。その必要な仕事・職場が「生産性が低いから低賃金だ」とされている。

その結果危機の瞬間に必要なものを提供できない経済になってしまっていることが明らかに... マスク・防護服を作り出す能力すらなくなってしまう日本経済。資本主義の不合理性がパンデミックへの対処を困難にしていることが明らかに。



コモン

ウイルスはすべての人に平等ではないことも明らかになりました。ソーシャルディスタンスのできる人は良いが出来ない人、不衛生な生活を強いられている人(世界で 20 億人)といった状況におかれた階層に矛盾が集中する。たとえばアフリカ・南米などに感染症・洪水・食料不足・負債の 4 重危機が集中。しかも経済ナショナリズムによって各国の競争が激化し開発されているコロナワクチンに対応できる国と出来ない国とが出来てしまう。

本来ワクチンは“コモン(公共財・社会的富)”として提供されるものであり医療・健康は普遍的権利と世界人権宣言に宣言されているようにグローバルな社会的公正が実現されるべきもの。しかし資本主義は決してこのコモンを実現できない(それ故に資本主義)と指摘しました。

COVID-19 パンデミック・気候変動の原因そして新しい社会へ

斉藤さんはコロナパンデミックの原因について“経済成長を優先した自然の乱開発・利潤獲得の最大化”にあると語りました。アグリビジネスで乱開発し未知のウイルスが出現する。複雑な生態系がそれ自体ファイアウォールとして機能していたのにそれを崩壊させてしまったがゆえに・・・中国では 10 年前に豚コロナが人に移る状況を、そして又今回の COVID-19 の出現もその流れの中と指摘。



又、衛生管理が十分でないがゆえにパンデミックへと拡大してしまう世界の現状から“グローバル化の脆弱性”“新自由主義の脆弱性”が明らかになったと。新自由主義の緊縮財政により医療の削減、その結果の医療崩壊。貧しいエッセンシャルワークの人々は危険の高い職場で働き、医療ケアにアクセスできない、死亡する方も多い。米国でパンデミックで入院し 62 日入院して医療請求額が 1 億 2000 万円といった現実から私達は何を読み解くのか?・・・

更に、経済成長優先の地球的規模での開発と乱開発、利益追求による環境破壊の結果 COVID-19 の危機と気候変動の危機が引き出されたのであるからこのような開発の方法は持続可能ではないと批判。そして CO2 を出していない人が CO2 を出して環境を破壊している経済の犠牲を受けている。収入下層の人々 50%の CO2 排出量が収入上位 10%の人々の CO2 排出量が同じなのに。しかも“技術的開発”では解決できないことも明らかにと指摘しました。

それ故“資本主義の格差の構造を根本的に是正する必要”を、“ブルシット・ジョブからエッセンシャルワークへ”“経済目的を根源的に変える”“経済成長を「進歩」とするパラダイムからの脱却”を訴えました。

「多くの人々のリスクと負担の上に、そして自由を抑圧する上にある経済利益の根本問題から“新しい生活へ”を気づかせてくれたのがコロナパンデミック。コロナ危機は気候変動危機への生活変容の最後のチャンスなのかも」とも語りました。

資本主義の下では成長できないのは良くない社会、すなわち『経済成長』が判断基準です。しかし人々の生活・自然を優先する社会へ、ブルシット・ジョブからエッセンシャルワークの社会へ変わっていかなければ COVID-19 危機の根本的解決はない。

COVID-19 危機のとき資本主義・新自由主義の一極集中の脆弱性が表れてしまいました。持続可能な社会を求めるが“持続可能な資本主義は幻想であり”“技術的なことで変われると思うのも幻想”です。だから“経済民主主義：労働における民主主義・生産における民主主義・環境における民主主義”を労働者協同組合と言う形で、社会運動で“コモン”を広げていくのがこれからの社会。

そのためにも「理論《哲学》」と「政策《政治》」そして「運動《市民》」を“総合ビジョン”として出すことの必要性を訴えました。

「民主主義と自治そして平和主義」ふじしろ政夫 047-445-9144

*活動報告 HPIに掲載「いい鎌ヶ谷ふじしろ政夫」でアクセスできます。